

Eichosha Commentary Booklet

E. M. Forster

A Passage to India

Annotated with an Introduction

by Muneharu Kitagaki



General Editor
Rikutarō Fukuda

EICHOSHA

E. M. FORSTER

A Passage to India

Annotated with an Introduction

by

MUNEHARU KITAGAKI

General Editor

RIKUTARO FUKUDA

EICHOSHA COMMENTARY BOOKLET

責任編集 / 福田陸太郎

インドへの道

<英米文学注釈ブックレット・5>

昭和 43 年 4 月 1 日 初版発行

定価〔原書共函入〕¥560

編注者 北 垣 宗 治

発行者 近 藤 恒 夫

印刷者 竹 内 隆

東京都文京区後楽 2 丁目 18 の 18

竹 内 活 版

発 行 所 東京都千代田区飯田橋 3-3-3 株式 英 潮 社
会社

電話東京 (263) 1641 (代)・6171 (代) 番

振 替 口 座 東 京 5 5 4 0 7 番

本叢書は原則として、函入合冊以外は販売いたしません。尚落丁、乱丁
本は本社でお取替えいたします。

は し が き

日本における英語教育は、いま転換期にさしかかっているようである。国際関係の密接になってきた現代では、文化の交流が間断なく行われ、それについてゆくためには、相当のスピードが要求される。狭くは、英語の読解力という一点から見ても、教室におけるテキストの精読と相まって、一冊の本を読み通してその要所をスピーディに把握するという能力がますます要求されてきている。英語教育は今こそ教室から街頭へ進出し、カミシモをぬいだ軽快な姿で闊歩すべき時代が到来したと見ていいのではないか。そういうことを可能にする新しい型の英語教育に好適な材料を提供するのが、英潮社ペンギンブックスなのである。

また一般に、外国で出版された書物を教科書として使うことはいろんな点で望ましいことであるが、それには二重の障害が伴う。一つは、必要なときにいつもすぐ一定の部数をそろえることが極めてむずかしいこと。もう一つは、日本人読者にとっては、その書物についてのある程度の解説や注釈がないと読みにくい場合が多いことである。英潮社ペンギンブックスは、これらの難点を見事に解決した画期的な企画であると言えよう。

先ずイギリスのペンギンブックス社と提携したために、常に豊富な在庫の中から必要部数を確保できることになったし、他方英潮社ペンギンブックスの一環として出される別冊の「注釈ブックレット」によって有益な手引が得られることになった。このブックレットは、作家・作品の解説、梗概、登場人物の紹介、語句の詳細な注釈などを含み、しかもわが国一流の学者を動員して執筆していただいたものであって、手軽に良い作品に親しむためには、これ以上の方策は望めないという気がする。

本シリーズでは、外国の原書をそのままテキストとして使用するわけであるから、版權取得に苦しむ必要もなく、数千点に及ぶペンギンブックスから次々と良書をえらび出して、注釈ブックレットと函入合冊の形で読者に提供しようとするものであり、すぐれた英語教材の範囲を無限にひろげたと言っても誇張とも思えない。

書目として最初は現代英米文学の長編名作をとり上げたが、以後は小説だけでなく、劇・エッセイ・詩などから現代まで多方面に好適な材料を求め、一般教養向のペリカンブックスなどをも含む一大シリーズに展開することを予想するものである。英潮社ペンギンブックスがわが国の英語教育に大きな役割を果たすことを願い、読者諸賢の変らぬご支援を乞う次第である。

1967年2月

責任編集者 福田陸太郎

Contents

はしがき	i
INTRODUCTION	1
CHARACTERS	17
NOTES (OUTLINE)	
第1部 回教寺院	22
第2部 洞 窟	73
第3部 神 殿	131

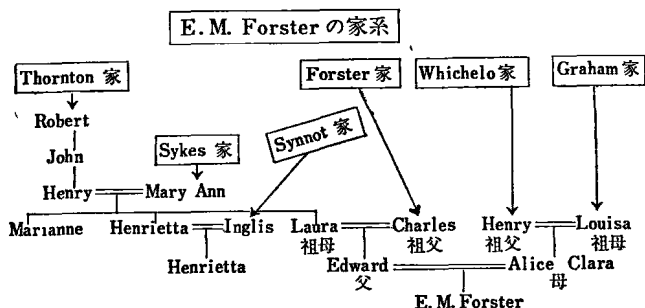
Introduction

1

フォースター (Edward Morgan Forster) は 1879 年 1 月 1 日にロンドンに生まれた。現在すでに 89 才の高齢である。作家としての名声は彼の五才年上に当るモーム (W. Somerset Maugham, 1874-1965) はもちろんのこと、三才年下のジョイス (James Joyce, 1882-1941) とウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941), 六才年下のローレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) に及ばないということは事実である。彼はジョイスやウルフほど野心的な実験家ではなかった。またモームのように、ひたすらに筋の面白さを追うこともしない。ローレンスのような予言者的なヴィジョンには欠けているといえる。わが国においてフォースターに関するはじめての書物が出版されたのは、まだ昨年 (1967 年) 3 月のことである。研究社の 20 世紀英米文学案内シリーズの中に、近藤いね子教授の編纂による一冊があらわれたのがそれである。これからフォースターの作品と取組もうとする人は、上記の書物からはじめるのがよいであろう。殊にそこには、近藤教授の苦心に成るかなり詳細なフォースターの伝記や、年表・書誌が収録されているからである。しかしその書をひもとくだけの時間のない人のために、ここにフォースターの経歴を要約しておこう。

2

フォースターの父は Edward Morgan Llewellyn Forster, 母は Alice Clara Forster という。この父親はアイルランド人で牧師をしていた Charles Forster と、イングランドの名家の出である Laura Thornton との間に生まれた人で、建築家であった。彼はフォースターが 1 年 10 か月のときに肺結核でなくなった。したがってフォースターは父親の顔を知らずに成長したのである。母は Whichelo 家の出身であって、その父 Henry Whichelo は学校教



師で図画を担当していた。フォースターは当然のことながら、この母に育てられて大きくなったのである。

人は誰でも四人の祖父母をもつ。すなわち両親のそれぞれの両親である。両親に焦点を合わすのであれば、一人の人物は二つの家系の血をひくということである。祖父母に焦点を合わすのであれば、四つの家が一人の血筋に貢献していることになる。フォースターの場合の四家とは、ここに掲げた簡単な系図表（というのは、この表ではフォースターにあまり関係のない人々を沢山省略しているからである。たとえば Henry Thornton には九人の子供があったし、Henry Whichelo には十人の子供があった。フォースターの父 Edward 自身、十人の子女のうち第八番目だった）が示すように、Forster 家、Thornton 家、Whichelo 家、Graham 家である。

フォースターの父方の祖父である Charles Forster はアイルランド人であった。彼は国教会派の牧師となり、Essex の Stisted で年収 900 ポンドを得ていた。この祖父には十冊にのぼる著作がある。そのおもなものは、彼が尊敬し、その下で副牧師をつとめていた Bishop Jebb の伝記ならびに書簡集などである。孫のフォースターはこれらの著作を少しも高く評価していないようである。

フォースターの父方の祖母である Laura はイングランドの名家 Thornton 家の出である。さきほど挙げた四家のうちではこの Thornton 家の格がいちばん上らしい。何しろ Laura の曾祖父の Robert、祖父の John はともにロシア貿易に従事して相当な産をなしたのみならず、二人ともイングランド銀行の頭取をつとめていた。また彼女の父 Henry は 24 才で Down, Thornton, and Free 銀行のパートナーとなり、国会議員でもあった。熱心なキリスト者で

あり、慈善事業家であり、奴隷売買制度廃止運動の闘士であった。

フォースターの伝記家はいずれもこの Thornton 家に重点をおく。それは一つにはフォースター自身が Thornton 家に関する資料を集めた上で、祖母 Laura の長姉で、彼自身にとっては大伯母にあたる Miss Marianne Thornton の伝記を書いているからである。従来娘が偉大な母親の伝記を書いた例（エーヴ・キューリーの『キューリー夫人伝』）や、息子が偉大な父親の伝記を書いた例（テニソンの息子の場合）はあるが、大甥が、大伯母の伝記を書くというのは大へん珍しい例であるといわなくてはなるまい。しかも Marianne Thornton はテニソンやキューリー夫人のような、世界的な名声を博した人ではなくて、恐らくフォースターがそれを書かなければ、今頃は殆ど誰一人として記憶する者がなかったであろうような、そういう人だったといわざるをえない。その上彼女は 1887 年に 90 才で永眠したのであるから、フォースターはこのときようやく 8 才であった。彼にとってはむしろ可愛がられることが迷惑なほど二人の間には年齢のひらきがあった。

にもかかわらず、彼が 1956 年に *Marianne Thornton 1797-1887: A Domestic Biography* (London: Edward Arnold) を出版したという事実の背後には、彼が 1924 年に *A Passage to India* を出版して以来、長編小説を書かなくなったことと関連して深い意味があるように思われる。ところで、Marianne はその死にのぞみ、フォースターに 8000 ポンドの遺産をのこした。彼がケンブリッジ大学に学ぶことのできたのは、まさにこの遺贈金のおかげであった。のみならず、その金ののこりで、彼は大学卒業後に二年ばかり大陸旅行することが出来た。そして彼にものを書かせる欲求をひきおこさせたのは、実にこの二年間のスイス、イタリア、ギリシア旅行だったのである。

さて Marianne は Henry Thornton の長女として生まれ、その下に八人の弟妹があった。彼女が 18 才のとき父がなくなり、九か月のちに母がみまかった。そこで当然のことながら、八人の弟妹の母親代りとなって彼女は一家のきりもりをしていくことになった。Marianne のいちばん下の妹が Laura であったから、彼女は Laura の結婚を物心両面から援助したし、Laura の子供たち、とくにフォースターの父 Edward を熱愛した。ところで、この Edward は、前途有望な建築家になったが、あっという間に他界した。そこで Marianne は Edward の一粒だねであるフォースターを、熱愛するようになったという次第である。

ここで Thornton 家の話を打ち切り、フォースターの母方の二家に話をうつそう。母方の祖父 Henry Whichelo は Stockwell Grammar School その他の学校で図画を教えていた。思いやりが深く、感受性の鋭い紳士であつたらしい。この人はフォースターが生まれるよりも 13 年前に妻と十人の子供を残して突然なくなった。

母方の祖母 Louisa は Graham 家の出身であるが、この Graham 家については殆ど何もわからない。ところがこの祖母はフォースターの言葉によると「生氣あふれた愛すべき女性で、とても面白く、機知にたけ、楽しみを好み、鷹揚で、将来のための節約などしない人であった」(近藤編『フォースター』p. 6)ということである。幼いフォースターと心が通うのはこの祖母と、Whichelo 家の人々であった、と彼は述懐している。近藤教授の指摘によれば、この祖母が *A Room with a View* の Mrs Honeychurch のモデルになったことはフォースター自身が認めるところであり、さらに *Howards End* の Mrs Wilcox, *A Passage to India* の Mrs Moore に成長していったと考えることができる。

3

1893 年から 97 年にかけて、フォースターは Tombridge School に通った。Tombridge はロンドンの南々東 29.5 マイルのところにある。この学校は 16 世紀以来の伝統を誇るパブリック・スクールである。英国のパブリック・スクールはその名前にもかかわらず私立学校であつて、ジェントルマンを養成することに目標を置き、具体的には Oxford, Cambridge の両大学に進学するための準備をほどこす貴族的な気風をもった教育機関である。ただし、Tombridge School 時代のことをフォースター自身は「不愉快ではあつたが、悲劇的ではなかつた」と言っている。彼のパブリック・スクールに対する意見は相当辛らつたものがあり、げんに *A Passage to India* では本文の 40 頁にインド在住のイギリス人の間では、芸術に対する“Public School Attitude”が英本国におけるそれよりもきついと述べているほどである。

彼の才能を本当の意味で引出し、彼に知的な喜びを味わわせたのは、1897 年から 1901 年にわたるケンブリッジ大学での学生生活であつた。彼はケンブリッジの中では最も美しい礼拝堂をもつ King's College に在籍した。最初は古典学を専攻し、のちに彼は歴史を専

攻した。成績は優等であったが、最優等ではなかった。彼の気質は Don として大学に残るために、あくせくとして勉強する、という風ではなかったようである。彼の学生生活にはむしろ羨ましいほどの余裕が感じられるのである。そして、この余裕なしには、恐らくケンブリッジ時代の最大の収穫ともいべき立派な師、ならびに友人にめぐりあうことはむずかしかったのではあるまいか。若者たちの間に真の友情が生まれ、それが育っていくためには、適当な分量の余暇と、適当な分量の知的な緊張を必要とするからである。

フォースターに最も深い影響を与えた教師は Goldsworthy Lowes Dickinson (1862-1932) である。Dickinson はケンブリッジ大学の政治学の講師をつとめ、のち終身フェローに選ばれて生涯を大学で送った人である。終身フェローになった点と、一生涯を独身で押し通した点で、彼は弟子のフォースターと共通している。Dickinson は Professor の称号はもらわなかったようである。彼は政治学の講師ではあったが、いったい何が専門なのかわからないような面がある。そのことは彼の著作のリストを眺めるだけでもあきらかである。彼は決して政治学プロパーの中にとじこもって、知識を体系化して満足するような人ではなかった。彼は第一次世界大戦前から戦中、戦後にかけての良心的な知識人の苦悩を十分に味わいつくした人である。国際連盟という考えを最初に提唱した一人であったし、時の英国政府の露骨な帝国主義政策と貿易保護運動に対して戦うために創刊された月刊誌 *Independent Review* の編集にも参加した。

いったい「影響」という言葉はど使いやすくて、しかも規定しにくい言葉はない。Dickinson がフォースターに影響を与えたということは事実である。しかしその実体は何であったろうか？ 恐らく影響というものは、その最も深いところにおいては表現できないような何物かであろう。しかし敢えて Dickinson の場合を要約してみるとすれば、第一に、彼のいきいきした問題意識ということになるであろう。若い頃に Shelley の詩に深く感動をおぼえた Dickinson は、政治学を専攻することによって、争いのない、人類の理想の社会をつくり出すための原理を学ぼうとした。彼は自分の考え方が学園というとどされた世界の中で固定化することを恐れ、それから脱却するためによく外国を旅してまわった。1912 年秋にはフォースターらと一緒にインドを訪れている。彼はそのついでに一人でシナ、日本へも立寄った。彼は、よりよい社会、よりよい国際関係をつくりあげるために、進んで各種の雑誌に寄稿して、識者の関心を高めようとした。このような社会と世界に対する態度がフォースターに

も伝わっていることはあきらかである。フォースターが *A Passage to India* の中でイギリス人对インド人の出会いの問題に焦点を合わせ、つとめて客観的にそのむずかしい状況をドラマタイズしているところに、Dickinson の弟子としてのフォースターの面目躍如たるものを認めて差支えないであろう。同様の問題意識は、フォースターのエッセイ集 *Abinger Harvest* と *Two Cheers for Democracy* にも見出される。

Dickinson がフォースターに与えた影響の第二は、想像力に満ちた物の考え方であったということができよう。彼は刻々に変化する世界の情勢を絶えず見つめていたが、それと同時に、将来起こるであろう出来事の多くを予見していた。彼は西欧が受け継いできた価値のすばらしさと限界の両方を認識していた。そのような価値の根源までさかのぼるために、ギリシア哲学の深みにまで沈潜するだけの知的な勇気があった。のちにフォースターが書いた伝記 *Golds-worthy Lowes Dickinson* (London: Edward Arnold, 1934) のエピソードの中で、フォースターはその師に関して「未だ経験されないものに対してもわれわれを鋭敏にし、彼がかつて生きたというそのことによって、われわれの他人に対する希望を強めてくれる」(近藤編、前掲書、p. 192) 人物であったと書いたのである。

フォースターのケンブリッジ大学時代で、今一人忘れてならない教師は Nathaniel Wedd という古典学者である。彼もまた King's College の Fellow であって、学生のためであればいくらかでも時間をささげて悔いない人であった。彼は Dickinson の友人でもあり、あとでのべる Apostles という討論会の会員でもあった。また *Independent Review* の編集にも参加している。フォースターに創作を試みることを暗示したのは、実にこの Wedd であった。Wedd はフォースターにとって単なる古典学の教師にとどまらなかった。彼はフォースターを知的に目覚めさせた恩人の一人であったといえる。

当時のケンブリッジ大学には、すでに 30 年にわたる歴史をもつ討論会で Apostles と呼ばれるものがあつた。かつては詩人テニスンもこの会の会員だったことがある。それは若手の教師、研究員、大学上級生らの集りで、会員の推薦をへて新会員になることができた。土曜日の晩が討論会にあてられた。会員たちは相手を議論で打ちまかすこと以上に、真理を追求することの方に一層多くの喜びを見出すといった、知的な集りであつた。完全な率直ささえあれば、何を発言しても、その発言は尊重された。こうした会こそが、知的

な探究という共同のいとなみを通して、真の永続的友情をつちかうものである。そして、上にのべた Dickinson と Wedd はともにその討論会の会員だった。

この会には、将来国際的な名声をはせることになる何人かが加わっていた。現在のケンブリッジ大学にすらこれだけの顔ぶれを揃えることができるかどうか疑わしいほどである。四人の哲学者 J. E. McTaggart, A. N. Whitehead (のちに Harvard 大学の教授になり、現代の思想に今なお影響を与え続けている)、Bertrand Russell, G. E. Moore に加えて画家 Roger Fry, 近代経済学の分野では光かがやく存在である John Maynard Keynes などがあり、さらに Desmond MacCarthy, Thoby Stephen, Lytton Strachey などとも会員であった。この Apostles のメンバーの何人かは、大学卒業後はロンドンの Bloomsbury にあった Stephen 家に集って討論を続けた。この Stephen 家の娘の一人で、“Bloomsbury Group” の一員であったのが Virginia Woolf 夫人である。

こうした雰囲気の中にあって、フォースターは大学の同人雑誌や *Independent Review* に小品や短篇小説を発表しはじめた。後年の作品に見られるユーモアに富んだ軽妙さと、ものごとを的確に、客観的に描写するという基本的な姿勢が、この頃の作品にうかがわれるのである。

4

1901 年の秋、フォースターは大陸旅行に出かけた。Florence には六週間も滞在した。イタリアは彼の二つの初期の小説、*Where Angels Fear to Tread* (1905), *A Room with a View* (1908) の舞台となった。これに対し *The Longest Journey* (1907) では Tombridge と Cambridge とが扱われている。1906 年暮から 1908 年にかけてロンドンの Working Men's College で一連の講演をした。1910 年には、三年前に Oxford で親しくなったインド人 Syed Ross Masood 氏とスイスを旅行した。(ちなみに *A Passage to India* の献辞は “To Syed Ross Masood and to the seventeen years of our friendship” となっている。) 同じ年には小説の第四作 *Howards End* が出た。紙数の関係からこれら四作品について触れることはできない。多くの事項を端折りながら、その後の経過を辿ることにしよう。

1911 年ごろからフォースターは文芸ジャーナリズムに関係し、雑誌の文芸欄で活躍するようになった。*The Heart of Bosnia* という劇を書いたが、これは一度も上演されなかった。1912 年秋第一回インド旅行を試みた。翌年「3 月まで Chhatarpur や Dewas (共に *A Passage to India* 第 3 部の舞台のモデル) その他を旅行し、3 月 24 日には親友 Masood を Aurangabad に訪問、Daulatabad の洞穴などを見物して、4 月 2 日、ボンベイから乗船、帰途につ」いた。第一次大戦中、フォースターはエジプトの Alexandria で国際赤十字の仕事に従事した。かたわら *Egyptian Mail* にエッセイを寄稿したが、それは 1923 年に *Pharos and Pharillon* という書物にまとめられた。もう一つの副産物は 1922 年に出た *Alexandria: A History and a Guide* である。

第一次大戦終結後、フォースターはロンドンに帰り、再び *New Statesman*, *Spectator* などに沢山の評論を書いた。一時は *Daily Herald* という労働党の雑誌の文芸欄を担当した。1921 年に第二回目のインド旅行を試みた。「以前滞在したことのある Dewas State Senior の藩王の秘書代理として赴任することになり、3 月末、再びインド到着。Dewas での生活は彼の見聞を広めたが、与えられた仕事の性格がつかめず、秋にはやめ、Hyderabad で教育長をしている Masood を訪問した後、11 月末帰途に着く」。こうして 1924 年に、ついに *A Passage to India* が Edward Arnold 社から出版された。この作品の故に翌年 Femina Vie Heureuse Prize と James Tait Black Memorial Prize とが彼に授けられた。

1927 年、フォースターは母校の King's College に招かれ、Clark Lecturer として一連の小説論の講義をした。これは同年のうちに *Aspects of the Novel* として出版された。また、この年に King's College の Fellow に選ばれた。

フォースターの短篇小説集 *The Eternal Moment* が出たのは 1928 年であった。また評論・エッセイのたぐいを集めた *Abinger Harvest* は 1936 年に出版された。もう一冊、同様の評論・エッセイ集 *Two Cheers for Democracy* が 1951 年に出ており、この中には親友 Syed Ross Masood の追悼文が収められている。この一文を読むだけでも、Aziz や Hamidullah がどのようにして創り出されたかが暗示されるであろう。1953 年に、インドでの思い出や、インドから書き送った手紙をまとめ、*The Hill of Devi* という題名のもとに出版した。*A Passage to India* の素材を探るのに欠かすことのできない資料である。この書の中には、*A Passage to India*

の第三部に描かれている Gokul Ashtami Festival の記録がある。

1944 年、フォースターは国際 P.E.N. クラブの会長に推された。翌 1945 年 10 月、インドの P.E.N. クラブ大会に招かれて渡印した。これが彼の第三回目のインド訪問である。1946 年に King's College の honorary fellow となり、それ以後ずっと同 College の中に住むようになった。以上が大学卒業から今日にいたるまでのおおよその経歴である。すでに 89 才でもあり、健在とはいえないまでも、彼はなお栄光に輝く晩年を彼の愛する母校 Cambridge 大学の中で送っているのである。

5

A Passage to India はおよそ十年がかりで完成したといわれる。描かれている時期は大体 1920 年ごろであろう。なぜなら、作品のほとんど終りのあたりで、Dr Aziz と Fielding が馬の遠乗りをするところがあり、その時 Aziz が "...but in the next European war—aha, aha! Then is our time." (p. 316) と言うところがあるからである。第一次大戦は 1918 年に終っており、Mau での出来事は Chandrapore での出来事よりも二年後である。ついでに言えば、この場面での Aziz と Fielding の議論は、Masood とフォースター自身の議論がほとんどそのまま取られているようである。さらに、Aziz のこの予言は見事に的中し、インドは第二次大戦後独立を達成した。しかし、それと同時にヒンズーのインドと、イスラムのパキスタンに分裂してしまったことも忘れてはならない。

また Chandrapore の位置であるが、フォースターの自注 (Everyman's Library Edition—ただし、僅かに二頁という非常に簡単なものである) でわかる通り、それは Bankipore というガンジス河沿いの東部インドの町をモデルにしている。読者は一度地図で Bankipore の位置を確かめてごらんになるとよい。この町は今でもむしろインドに属している。Mau はテキストでは Chandrapore の西方数百マイルのところ、という想定になっているが、モデルは Chhatarpur と Dewas であり、Mau は Chhatarpur の藩王の所有する宮殿のあるところである。

作品のタイトル *A Passage to India* はわが国では『インドへの道』で通っている。このことに異論をさしはさむつもりはない。ただここで注意したいのは、このタイトルは "A Road to India" で

はないということである。Road が普通名詞であるのに対し、Passage はもともと抽象名詞であって、動詞 pass からの派生語である。興味のある人は一度 passage という語を英英辞典で引いてみられるとよい。そこには、或る方向へ向かって進むこと、すなわち「旅」ないし「航海」という意味がふくまれているのである。このタイトルは、まだインド、真のインドへは行きついていないということをも暗示する。この作品を読んでみればすぐにそのことがわかる。どうしたら真のインドへ行きつくことが出来るのであろうか？この作品の中にはそのような努力をするイギリス人が登場する。ところで、真のインドへ行きつこうと努力しているのはイギリス人だけではない。インド人もまた、インド人の立場から同じ努力をしているのである。

著者のフォースターは、このタイトルが Walt Whitman の *Leaves of Grass* の中にある “A Passage to India” というタイトルの詩から来たものであることを、自注の中でことわっている。この詩の中の “A Passage to more than India” という行が注目をひく。なぜならフォースターの作品は、インド以上のもの、インドの彼方にあるものへの道をもさし示しているからである。いいかえれば、この作品はそのような仕方でも普遍的な価値をさし示しているということができる。

わが国ではすでに田中西二郎氏による翻訳が新潮文庫におさめられている。学生諸君に教師の老婆心から申し上げたいことは、田中さんの名訳にまどわされて、原文をおろそかにするなかれ、ということである。翻訳は、どれほどすぐれたものであっても、それはすでに一つの解釈の上に成立つものである。私自身この訳業を参照させて頂いているので、それを利用する学生諸君をとがめる気持は毛頭ないけれど、翻訳から一步も脱却できないような学生はだめだと思ふ。

ここにはこの作品の梗概を述べることはしない。それは以下の頁で、各章別のあらすじを辿っていけばわかることだからである。この筋書だけを辿ってみて、読者がこの作品に失望されようと、それは自由である。ここには熱烈な恋愛の場面は一つも出てこない。Adela Quested が、将来結婚することになるであろう若い官吏 Ronny Heaslop と手を握り合う、というのがこの作品の中の殆ど唯一の熱情的な場面である。ここには殺人の話もなければ強姦の話もない。もっとも、Dr Aziz が訴えられるのは、彼が Miss Quested に強姦しようとしたと考えられたためであったが、強姦が行われな

かったことは Miss Quested 自身が認めている。ここにはむろん戦争の話もない。官能を刺激するような面は何一つとしてない。にもかかわらずこの作品が「面白い」のは、やはりそれなりの理由があるからである。先ず、この作品の重みをインド側から支えているのは Aziz であり、同様にそれをイギリス側から支えているのは、はじめに Mrs Moore と Miss Quested、のちに Fielding だということとはあきらかである。Aziz は殊に興味深い男である。私自身は彼の中に、トルコとサウディ・アラビアから極東の日本にいたるまでの、全アジア人の特質の一部分が反映しているように思えてならない。

Aziz は愛すべき男である。インテリで、口八丁手八丁のところが、彼なりにナショナリストであるが、自分を理解してくれる人であれば国籍、皮膚の色、性別をこえて打ちとけるだけの柔軟さをもっている。時と場合によっては平気で口から出まかせを言う。彼は理性に基いて判断することよりは、感情に基いて、特に自分が好きであるか嫌いであるかに基いて判断することが多い。彼は早合点し、先まわりして考える。Fielding の結婚の相手が Miss Quested であると、最後まで信じて疑わなかった。彼は窮したときには年甲斐もなくすすり泣く。Chandrapore の駅で逮捕されようとするとき、彼は身に覚えがない筈なのに、逃げようとする (p. 159)。この Aziz は詩人であり、また感傷的な気分で詩を朗誦することが好きである。Aziz は愛すべき男である。

Aziz に対しての Miss Quested, Mrs Moore, Fielding 三人は西洋の理想主義を代表する。Miss Quested と Fielding は恐らく西洋の伝統の中でもギリシア風の智慧を代表し、Mrs Moore はキリスト教的な愛を代表するといつて差支えあるまい。彼らはそれぞれの理想主義、合理主義、人道主義に基いて、正義はどこでも実現されなくてはならないこと、善意は通じ合うべきものだと思つて疑わない。ところが、そのような西洋流の理想主義に対して、インドは反撥するのである。インドのみならず、インドにおけるイギリスの支配者たちも、もはやそれを受入れることが出来ないのである。この作品のもつ conflict は実にここにある。Marabar 洞窟が何を象徴するにせよ、東洋人の気持が通じると考えられた Mrs Moore と、若い理知的な Miss Quested が、それによって決定的な衝撃を受けたことは事実である。Mrs Moore はついにその衝撃から立ちなおることはできなかった。Fielding 自身ですら、結局はイギリス婦人と結婚することによって (ただし Mrs Moore の娘